

# 「波立つ歴史」の実践

—「多角的・多面的」な見方を醸成し、高大接続を行うための試み—

中央大学附属横浜中・高校 柴 泰登

## はじめに

人生の折り返し地点を過ぎたであろう昨今、今回の研究報告を行うにあたってふと改めて自分の半生を振り返ってみた。然るに、ブラジルのガイゼル政権（1974～1979）に抵抗する都市ゲリラに身を投じた実父との生活から人生が始まった自分が、長じてアジア・アフリカ諸国を彷徨するようになり、世界史に関わる仕事に就くようになったのは、ある意味「当然の帰結」だったと感じる。

ところで、アフリカ・アジア諸国を訪問するという事は、必然的に多くの「発展途上国の現実」に触れることになる。軍事政権に抑圧されていたミャンマーの少数民族、内戦に悩むマリのドゴン族、アジア最大のスラムであるフィリピンのパヤータスを目の当たりにして、自分は「人を幸福にするために生み出されたであろう文明が、どうして人を不幸にする場合があるのか」を真剣に考えるようになった。

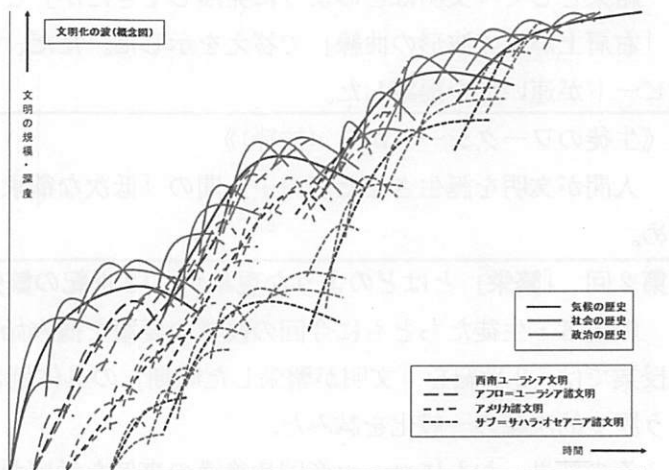
今回の報告は、そういった問題意識を持つ中高教員が、「文明」をキーワードとしながら行った授業実践報告である。実は、この試みは既に2017年度から開始されており、一度目の報告は『歴史分科会研究報告』（第46号）で行われている。そちらも参考にされながら、この3年間における文明史観や授業形態の変化を比較していただくのも一興かと思われる。

## 1 授業開始に至るまで

今回の授業を準備するにあたって、まず行ったことは、自分の文明論の精緻化である。具体的には「文明発展の様相をどのような形で表すか」の仮説を立てた。

結果として私が作成したグラフが【図】である。先行研究を参照し、自分なりの創意工夫を加味して作成したこのグラフのポイントは、以下の通りである。

- ① 文明発展が波形を描きながら「右肩上がり」の傾向を見せること
- ② 大きな波形が「小さな波形の集積」の形で表されること
- ③ 地域別で文明成立の開始時期や発展の度合いは異なるが、最終的には「1つ」に収斂すること
- ④ 分野別（気候・社会・政治）で波形の「周期」が異なること



【図】自分が仮定した「文明発展」の形

ここに至り、①～④の要素を生徒たちに考えてもらうためには、従来の講義型よりも生徒参加型の授業展開が適しているのではないかと考えた。そのため今回の授業では「ジグソー法」を採用した。

ただし今回はコロナ禍で短縮授業となったため、ジグソー法における「エキスパート作業」までは、事前に配布したワークシートを利用して学習するように生徒に予め指示した。そして、授業時間では「ジグソー活動」と「クロストーク」に集中し、自分の回答を考える最後の作業は宿題とした。このように、今回はやや変則的な形でのジグソー法実践となった。

## 2 実際の授業展開

前提となる授業環境は以下の通りである。

対象学年：高校3年 ※全範囲既習済み

参加生徒：5名（男子3名 女子2名）

授業時数：40分×3回（第1・4・5回）

35分×2回（第2・3回）

本校では、高校3年の3学期に、中央大学への推薦が内定した生徒に対して特別講座を行っている。

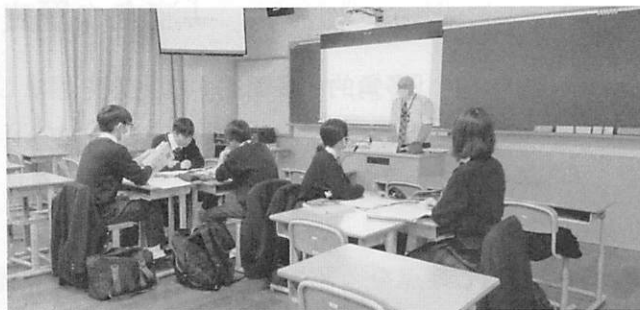
この点は3年前と同じであるが、ICT機器が充実してきたことが相違点として特筆されよう。そのため、今回はプロジェクターを利用した授業展開が可能となった。また、授業全体においては「文明について」という「大きな問い」を設定する一方で、各授業においては生徒が活動しやすくなるよう、「小さな問い」を設定して授業を行った。

さてここからは、各回の授業展開についてその概要を記す。実際の様子は、QRコードから接続出来る各動画もご参照いただきたい（第1回のみ、報告者の録画ミスにより途中で切れている）。

### 第1回 人類はなぜ文明を誕生させたのか、そして文明はどの様に発展してきたか？

初回の授業で、ジグソー法のレクチャーを行いながらの展開となったため、全体としては静かな立ち上がりとなったが、クロストークを行うとエキスパート教材からの問いかけの意味は正確に理解しており、上々の滑り出しだったと言える。

結果として「文明はどのように発展してきたか」という問いに対し、最終的には男女チームとも「右肩上がり」で波形の曲線で答えを示した。ただ、女子チームより男子チームの方がより発展のスピードが速い形を提案した。



実際の授業の様子



《生徒のワークシートから（抜粋）》

人間が文明を誕生させた理由…人間の「低次元な欲求」。ずっと住むならもっと豊かな生活がしたいため。

### 第2回 「繁栄」とはどのような現象か、「2世紀の繁栄」はなぜ起こったか？

報告者・生徒たちともに今回の授業の要領を掴み始め、議論が活性化してきた。この授業では、2世紀を「文明が繁栄した時期」の具体例として挙げたうえで、「繁栄」という歴史的現象の一般化を試みた。

その結果、おもにローマ帝国や後漢の事例を挙げながら、生徒たちは「文明的に繁栄している状況」を以下の様に結論付けた。

- ① 気候が温暖化すること
- ② 交流と外交が活発化し、文化的な発展が見られること
- ③ 大国が存在し、かつ勢力が均衡していること
- ④ 安定した政治体制が確立していること

《生徒のワークシートから（抜粋）》

第2回授業の感想…大国間での安定・繁栄が外交・物流を通して他国へと伝染していくのではないかと。メカニズムは偶発的に起こるものなのか？

### 第3回 「危機」とはどのような現象か、「14世紀の危機」はなぜ起こったか？

第2回とは反対に、14世紀を事例としながら、「文明が危機を迎えている状況」について、同じく一般化を行った。その結果、生徒たちは次の4点に状況を整理した。

- ① 気候が寒冷化すること
- ② 社会不安や不満が増大すること
- ③ 文明相互の無理解が拡大すること
- ④ 既存権力や権威が衰退すること



この段階になると、②の典型例としてユダヤ人迫害、④の根拠としてアナーニ事件を紹介するなど、自らの考えを歴史的事項と結び付けて説明することが出来るようになってきた。

《生徒のワークシートから (抜粋)》

第3回授業の感想…文明の発展のグラフで見ると、「危機」は「傾きの大きい」場所なのでは？「危機」の時のほうが、改革・革命を起こしてもう一段上へと文明を押し上げようという意欲が強い印象がある。

第4回 「繁栄」と「危機」の違いは何か、20世紀は「繁栄の世紀」か「危機の世紀」か？

第2回・第3回の成果を踏まえ、まず男子チームを「危機」、女子チームを「繁栄」の立場に分けてクロストークを行わせた。そうして明確な相違点を導き出したうえで2回目のクロストークを実施し、今度は立場の設定を外して自由に討論させた。

その結果、両チームとも当初の立場をそれぞれ維持した結論を提示したが、発表の中で「第一次・第二次世界大戦は確かに『危機』であったが、それは『繁栄』の準備にもなった」と発言するなど、「歴史的事項の多面性」への気づきが見られるようになった。



《生徒のワークシートから (抜粋)》

「繁栄の時代」と「危機の時代」の相違点…地球規模の問題があると「危機」、無いと「繁栄」。

第5回 文明はどの様に発展してきたか (再考)、そして今後の文明はどうなっていくのか？

第1回の問いを再考させてこの授業の成果を見るとともに、歴史的事象を基に将来を考察させることで、歴史の有用性を意識させることにした。この頃までには生徒もジグソー法に習熟し、生徒たちは非常に活発な議論を行うようになった。

最終的に生徒たちは、苦心しつつも自らの基準で時代区分や地域区分を行い、それを基礎として文明発展の形を考えるようになった。男子チームは、将来の見通しとして、グローバル化による「諸文明の収斂」にも言及していた。



《生徒のワークシートから (抜粋)》

自分で調査したこと…地球の間には、海・熱帯雨林・砂漠などの人の移動を妨げるものがある。アフリカ大陸やアメリカ大陸、オセアニアは他の文化圏と交流が少なかったため、複数の文化圏の交流があったユーラシア大陸に比べ発展は遅くなった。

修了課題 もし自分が「世界史の教科書」の執筆者となったら…何を書く？

ワークシートの最後では、修了課題と称して『10章立て』で教科書を書くとしたら何を取り挙げるか」というテーマで表を作成させた。この作業を行わせた理由は、この作業により3年間および今回の授業で「生徒たちが吸収したことや関心の強いところが見える」と考えたからである。

例、女子チームの生徒が作成した表 (抜粋)

章名	おもな対象時期	おもな対象地域	おもな内容	章立てした理由
序章 世界のおこりと 人類史の始まり	138億年前～ B.C. 3000頃	全世界	人類の進化、移動・ 言語や記録、農耕牧 畜・村の発生など	世界史が、様々な学問と繋がっているというロマンを体感したら、きっと世界史が大好きになると思った。





## 《参考文献》

- アルフレッド・クローバー, 堤彪・山本証訳『様式と文明』(創文社刊) 1983  
アンドレ・グンダー・フランク著, 山下範久訳『リオリエント  
アジア時代のグローバル・エコノミー』(藤原書店) 2000  
イアン・モリス著, 北川知子訳『人類5万年 文明の興亡 上下』(筑摩書房) 2014  
I・ウォーラーステイン著, 川北稔訳『近代世界システム I~IV』(名古屋大学出版会) 2013  
ウィリアム・H・マクニール, ジョン・R・マクニール著, 福岡洋一訳  
『世界史 人類の結びつきと相互作用の歴史 I・II』(楽工社) 2015  
エマニュエル・トッド著, 大野舞訳『エマニュエル・トッドの思考地図』(筑摩書房) 2020  
エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ著, 稲垣文雄訳『気候の歴史』(藤原書店) 2000  
E・H・カー著, 清水幾太郎訳『歴史とは何か』(岩波新書) 1962  
グレゴリー・クラーク著, 久保恵美子訳『10万年の世界経済史 上下』(日経BP社) 2009  
ジェフリー・ブレイニー著, 南塚信吾監訳『小さな大世界史』(ミネルヴァ書房) 2017  
ジャック・ル＝ゴフ著, 菅沼潤訳『時代区分は本当に必要か?』(藤原書店) 2016  
ジャネット・L・アブー＝ルゴド著, 佐藤次高・ス波義信・高山博・三浦徹訳  
『ヨーロッパ覇権以前 上下』(岩波書店) 2001  
ジャレド・ダイヤモンド著, 倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄 上下』(草思社) 2000  
ジョン・D・コックス著, 東郷えりか訳『異常気象の正体』(河出書房新社) 2006  
デヴィット・クリスチャン著, 渡辺正隆訳『ビックヒストリー入門  
科学の力で読み解く世界史』(WAVE出版) 2015  
A.J.トインビー著, 蠟山政道訳『トインビー(世界の名著73)』(中央公論社) 1979  
A.トフラー著, 徳岡孝夫監訳『第三の波』(中公文庫) 1982  
B・フェイガン著, 東郷えりか訳『古代文明と気候大変動』(河出文庫) 2008  
B・フェイガン著, 東郷えりか・桃井緑美子訳『歴史を変えた気候大変動』2009  
ナヤン・チャンダ著, 友田錫・滝上広水訳『グローバリゼーション  
人類5万年のドラマ 上下』(NTT出版) 2009  
フェルナン・ブローデル著, 浜名優美訳『地中海 I~V』(藤原書店) 2004  
K.ポメラント著, 川北稔訳『大分岐』(名古屋大学出版会) 2015  
マッシモ・リヴィーバッチ著, 速水融・斎藤修訳『人口の世界史』(東洋経済新報社) 2014  
岩崎育夫『講談社選書メチエ611 世界史の図式』(講談社) 2015  
大阪大学歴史教育研究会編『市民のための世界史』(大阪大学出版会) 2014  
大塚柳太郎『新潮選書 ヒトはこうして増えてきた 20万年の人口変遷史』(新潮社) 2015  
北村厚『教養のグローバルストーリー』(ミネルヴァ書房) 2018  
鈴木董『文字と組織の世界史 新しい「比較文明史」のスケッチ』(山川出版社) 2018  
妹尾達彦『講談社選書メチエ223 長安の都市計画』(講談社) 2001  
妹尾達彦『グローバルヒストリー』(中央大学出版部) 2018  
田家康『気候文明史 世界を変えた8万年の攻防』(日本経済新聞出版社) 2010  
水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』(山川出版社) 2008  
南塚信吾『「連動」する世界史』(岩波書店) 2018  
三谷博・並木頼寿・月脚達彦編『大人のための近現代史 19世紀編』(東京大学出版会) 2009